北里柴三郎の歩んだ道（1）

北里柴三郎は、阿蘇の山麓の小国郷北里村(現在の熊本県阿蘇郡小国町北里)で代々庄屋を務める北里惟信とその妻・貞のもとに、9人兄弟の長男として、嘉永5年12月20日(新暦1853年1月29日)に生まれました。8歳になると父の姉の嫁ぎ先である橋本家に預けられて四書五経を教わるなど、2年間厳しくしつけられました。10歳の時には今度は母の実家に預けられ、漢籍や国書を4年間学びました。その後、家に戻った北里は、「軍人になりたいので兵学寮（のちの士官学校）への入学したい」と両親に伝えます。しかし両親は北里が軍人になることを許しませんでした。

北里柴三郎の生家
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室

この頃、熊本藩最後の藩主・細川護久は、家臣たちの将来を案じて、藩内の子どもなら誰でも入学できる学校を建てることを考え、明治4（1871）年2月、熊本城の近くの古城に西洋医学の藩校・古城医学校を新設しました。父・惟信（これのぶ）は、藩主が開校した古城医学校への入学を勧めて、北里に医者になるよう説きます。しかし北里は「医者にだけはならない」と言い放ち、一歩も引き下がりませんでした。これには両親に加えて親戚一同もこぞって反対したため、北里は親の言うことを一旦は聞き入れて、明治4（1871）年、古城医学校（同年7月の廃藩置県により熊本医学校に改称。現在の熊本大学医学部）に入学することになります。ここで初めて北里は医学に触れることになりました。古城医学校は、学費を藩が全額負担するため無料だったこともあり、藩内各地から多くの子ども達が集まりました。全寮制の古城医学校では、生徒は城内にある学校の敷地に建てられた寄宿舎で寝泊まりします。同級生には同郷の藩医の子、緒方正規（後の東京帝国大学医科大学長）もいました。北里は、親の意向で医学校に入学はしたものの、医者になるつもりは毛頭なく、将来に備えてひとまず外国語の勉強に力を注いでいました。そんな北里を医学と結びつけたのは、古城医学校に着任したオランダ人軍医のコンスタント・マンスフェルトでした。

熊本医学校時代
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室

マンスフェルト
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室

マンスフェルトは北里の学問への熱心さに大変感心していました。ある日、北里はマンスフェルトから将来何になりたいかを尋ねられました。返事に困った北里は、少し考えてから、申し訳なさそうに「軍人になりたい」と答えました。昔から変わらない北里の正直な気持ちだったのです。この時マンスフェルトは、医学も社会に貢献できる重要な勉強なので、語学の勉強と同様におろそかにせず精進するよう話しました。そんな北里に転機が訪れます。オランダで発明されたという顕微鏡を覗いた時のことでした。何気なく機器の上のレンズに目をあてがうと、球形や円筒形など、様々な形をしたバクテリアがたくさん動き回っていたのです。生まれて初めて目の当たりにした不思議な光景に、北里は目を輝かせました。顕微鏡の中に未知の世界があることを知り、その素晴らしさに魅せられた北里は、ついに医学に興味を抱くようになります。語学の勉強とともに、医学の勉強にも熱心に取り組み始めたのです。そんな北里をマンスフェルトは助手に抜擢し、解剖学、組織学、顕微鏡学、生理学、病理総論等の授業の通訳を任せます。これにより北里の語学と医学の知識はみるみる向上していきました。熊本医学校での任期を終えたマンスフェルトは、北里に、「もし君が医学の道を進むのであれば、郷里を出て東京の医学校に進み、卒業したら、さらに国を出てヨーロッパに留学しなさい」と助言をし、別れを惜しみながら去って行きました。

北里はマンスフェルトの勧めに従い、郷里を出て、明治7（1874）年11月、東京の神田区泉町の東京医学校（明治10年に東京大学医学部に改称）に入学します。熊本医学校で同級だった緒方正規は途中で東京医学校に転入していたため、緒方に3年遅れての入学でした。

恩師・マンスフェルトとの出会いにより、軍人に憧れた一人の青年は、世界中の多くの人類を感染症から救う「日本近代医学の父」へと歩み出していくのです。